そこに。

柚色の空の裂け目から
ゆるり落ち去く　星の粉

こぼれる木々の背の羽に
許されるはずのものならば

泥に埋もれたパンくずも
花と燃え立つささやきも

この身体に纏りつく死の香りも
あの陽炎に沈む蝶の声も

いつか芽吹く色彩に
包まれる日が来るのだろうか

無知の川で溺れるか
虚構の橋を渡り切るか

果て無く続く　日の輪の如き
か弱き愚かな者どもは

……咲下月世

夢の厚さなど　計りはしない

未知の限りを繰り返せ
我が清純な　その海で

あの上空を支配する
歌う狂い鳥の　その様に

汚れ尽くした魂の揺らぎ
生への裏切りへの　賛美

そうして　それは　そこに在る

あお、として。

恐らくは
耐えがたい程の欲望の
上に敷かれた　自己犠牲

ふやけ切った親指の
第一関節　重症で

伝えられない全てのものは
落ちる雨の中に在り

触れる意識は毬になり
乱反射の法則の
笑顔でご機嫌麗しゅう

琥珀色した股の奥
荘厳な舌で噛みちぎり

したたる無数の連鎖が
深い青の石となる

澱んだ力に溜まる垢
流れる速さを間違えて
形造られ　こねられて

幾分激しく　縛られて

壁に君臨し　花魁（おいらん）の
扇子のひもに　ぶら下がる

薄紫に散る雲の
彼方のゆるい浮月よ

片割れ探す　血の行方
案じて夜を纏うなら
せめて　漆黒の嘘であれ

この頭から伸びてゆく
ふやけ　焦げ去く　親指は

いつか　己の真となる

間際。（まぎわ）

枕に沈む夕焼けと
鏡に寄せる　さざ波が

薔薇の本能を創り出す

一人おどける前髪が
帆先の上で光浴び

僕の肩の皮膚の上
彫られた天の絵画の様に

午前三時の岸辺にて
ワイングラスの泡となる

海の底の　また底の
錨の声に誘われて

いつかの水兵　列をなす